

資料

小児看護学における保育園実習の学習効果に関する文献検討

Literature Review on Learning Outcomes of Nursery School Practice of Pediatric Nursing

杉村 篤士¹⁾
Atsushi Sugimura

佐藤 朝美¹⁾
Tomomi Sato

永吉美智枝¹⁾
Michie Nagayoshi

廣瀬 幸美¹⁾
Yukimi Hirose

キーワード：保育園実習、学習効果、文献検討、小児看護学

Key Words：Nursery School Practice, Learning Outcome, Literature Review, Pediatric Nursing

I はじめに

臨地実習は臨床実践能力の向上を図ると共に、これまでに学んだ知識や理論、技術を実践に結びつけて理解する場であり、看護学教育において重要な位置づけとなっている¹⁾。小児看護学実習においては、看護の対象が発達途上の子どもであるため、疾患や障害だけではなく、子どもの発達段階を理解したうえで成長・発達を促す援助を学ぶことが目的となっている。そのため、8割以上の教育機関が、小児看護学実習で病棟実習とは別に、保育園・保育所実習（以下、保育園実習と称す）を取り入れている²⁾。

本学においても、「乳幼児と関わる体験を通して、子どもの成長・発達、生活習慣ならびに子どもをとりまく環境について理解するとともに、自己の子ども観を深める」を実習目的に、4日間の保育園実習を取り入れている。しかし、現代の学生たちは少子化・核家族化の社会のなかで生活しており、子どもとの関わりが少ないため乳幼児のイメージができず、成長・発達を理解しにくい状況にある。学生たちの実習後のレポートから、保育園実習での学習効果は得られていると評価できるが、より効果的・効率的な保育園実習を目指し実習方法の向上に取り組んでいきたいと考える。

1997年のカリキュラム改正で実習時間が短縮されたことをきっかけに、保育園実習の学習効果を高めるための研究が実施されているが、教育機関により教育課程や保育園実習の概要は異なり、研究に示された実習方法を一概に本学に取り入れることはできない。先行研究においては、自校の保育園実習の実習方法と学習効果について検討している研究が多く、保育園実習に関する研究を収集し教育的示唆を得ている研究はない。そこで本研究では、4年制大学（以

下、大学と称す）・短期大学（以下、短大と称す）の教育機関で行われている研究から、保育園実習の学習効果を検討し、より効果的な教育方法について示唆を得るとともに、保育園実習における課題を見出すことを目的とする。

II 方 法

1. 文献検索の方法と検索結果

文献検索は医学中央雑誌、CiNii Articles（国立情報研究所論文情報ナビゲーター）の文献検索データベースを使用した。検索期間は、カリキュラム改正で実習単位数が減少された1997年から2014年2月までを対象とした。医学中央雑誌では、「保育園実習」と「保育所実習」をキーワードとし、会議録を除いた看護の研究で検索した。その結果、「保育園実習」23件、「保育所実習」18件となった。CiNii Articlesでは、「保育園実習」と「看護」を掛け合わせ20件、「保育所実習」と「看護」を掛け合わせ19件であった。

抽出された文献80件のうち、総説や重複文献、他領域の文献、大学・短大以外の文献は除外し27件となった。さらに、保育園実習による学習効果について記載がある文献を選定し19件となった。なお、本研究の目的に沿った保育園実習に関わる文献数が少なかったため、商業誌ではあったが研究内容が詳細に記載されている1文献も含め、最終的に20件の文献を本研究の分析対象とした。

2. 用語の定義

本研究においては、学習効果を保育園実習にて学生が学び得た態度、知識、技術とした。

Received : October. 30, 2014

Accepted : January. 16, 2015

1) 横浜市立大学医学部看護学科小児看護学

3. 分析方法

選定した文献から学習効果の記載を抽出、分類し、それらを類型化した。さらにこの抽出結果を、保育園実習の実習期間や実習方法と照らし合わせ分析した。

Ⅲ 結 果

保育園実習に関連する文献一覧を表1-1、1-2に示す。文献一覧は学習効果と実習日数を観点に整理した。研究対象となっていた教育機関は、大学7件^(文献2,3,11,12,15,19,20)、短大13件^(文献1,4,10,13,14,16,18)であり、研究方法は、量的研究4件^(文献8,15,18,20)、質的研究12件^(文献1,2,4,5,7,11-14,16,17,19)、トライアングレーション4件^(文献3,6,9,10)であった。

1. 保育園実習の概要

1) 履修年次

保育園実習の履修年次は、大学では4～3年次2件^(文献2,11)、3年次3件^(文献3,15,19)、記載なし2件^(文献12,20)であった。短大では、3年次7件^(文献1,6,8,10,16,18)、2年次4件^(文献4,5,7,14)、1年次1件^(文献17)、記載なし1件^(文献13)であった。また、保育園実習後に病棟実習を実施している教育機関は、実習の順序性の記載があった13件中10件^(文献5,7-9,11,14-16,18,19)であり、残りの3件^(文献1,6,20)は実習グループにより順序が異なっていた。

2) 実習日数

実習日数は保育園現地に出向く前の事前学習日や帰校日を含め、10日～1日であり、平均4.1日であった。10日1件^(文献7)、6日2件^(文献12,18)、5日6件^(文献1,2,8,11,14,15)、4日3件^(文献3,5)、2日4件^(文献6,9,13,16)、1日2件^(文献17,19)、記載なし3件^(文献3,7,20)であった。

3) 実習方法

保育園実習の実習方法として、事前学習^(文献1,8,11,12,19)やディスカッション^(文献1-4,8,10,12)を取り入れていた。事前学習の内容は子どもの成長・発達、日常生活習慣、事故、保育園の概要などであった。実習の受け持ちについては、継続して同じクラスを担当する方法^(文献9,12,16)、異年齢のクラスを担当する方法^(文献2,7)に分かれていた。実習中の記録用紙では、アセスメントシート^(文献7)や成長・発達の観察記録^(文献13)を用いたり、学生主体でお楽しみ会を企画・実施・評価する機会を設けていたりする実習方法^(文献11)もあった。

2. 保育園実習における学習効果

文献における学習効果に関する記載は、『子どもの理解』と『子どもとの関わり方の理解』の2つに分けられ、『子どもの理解』は、「成長・発達の理解」と「子ども観の形成」によって構成されていた。さらに、これらの学習効果毎に、保育園実習期間の平均日数を算出し比較した。

1) 子どもの理解 (平均日数：4.1日)

『子どもの理解』とは、保育園実習における子ども自身に対する学生の学びのことであり、この内容については18

件^(文献1-11,14-20)に記載があった。

(1) 子ども観の形成 (平均日数：3.8日)

「子ども観の形成」とは、学生の子どもの捉え方の変化のことであり、この内容については14件^(文献1-6,11,14-20)に記載があった。学生の子どもの像の肯定的変化がみられた文献は5件あり^(文献1,3,14,18,19)、子ども観の肯定的変化は実習期間が1日であっても変化がみられていた^(文献19)。子ども観の内容としては、かわいい^(文献1,5,15,16,20)、想像力が豊か^(文献1,2,11)、好奇心旺盛^(文献1,5)、自己主張が強い^(文献15)といった内容が挙げられていた。子ども観の変化は、実習前に子どもとの接触経験がない学生の方が有意に好転していた($p<.001$)^(文献3)。実習の順序性に関しては、病棟実習と保育園実習のどちらを先にしても子どもに対するイメージに相違はみられないという文献があった^(文献20)。

(2) 成長・発達の理解 (平均日数：4.2日)

「成長・発達の理解」とは、学生の子どもの成長・発達に対する学びのことであり、この内容については14件^(文献1-10,14-17)に記載があった。学びの内容としては、年齢・月齢差の理解6件^(文献2,4,6,14,15,17)、個人差の理解6件^(文献2,3,6,7,15,17)が挙げられていた。その他に、子どもは遊びを通して社会性を身に付けていることや^(文献1)、子ども同士の集団のなかで成長していくこと^(文献1,2,7)、親や家庭環境の影響が成長への影響が大きいこと^(文献7)といった、成長・発達の環境要因についても理解できていた。実習日数は、2日間の実習においても、学生全員が健康な子どもの成長・発達を理解できていたとされているが^(文献9)、同研究者による追加研究で、学生は分析・応用する力が弱い傾向が研究結果として示されていた^(文献16)。保育園実習後に病棟実習を実施するという実習の順序性に関しては、順序性による成長・発達の学びへの影響はみられないという文献があった^(文献6)。

2) 子どもとの関わり方の理解 (平均日数：4.5日)

子どもとの関わり方の理解とは、学生が子どもへの援助方法や関わる時の意識についての学びであり、この内容については13件^(文献1-13)に記載があった。関わり方の理解として、子どもの発達段階に合わせた個別的な関わり方の必要性8件^(文献1-3,5-8,11,13)、褒めることや認める関わり方の大切さ4件^(文献1-3,7)の記載があった。この他、観察や見守り^(文献2,7,12)、安全な環境づくり^(文献1,7,8,13)といった、子どもへの間接的な関わり方の理解も得られていた。実習日数は、2日間の保育園実習では子どもへの対応に困難さを感じており、特に子どもの接し方や平等な対応の仕方、一度に何人もの子どもと関わることに難しさを感じていた^(文献9)。一方、4日間の実習では、実習1日目に子どもへの対応ができなかった学生が、子どもに対しての効果的な言葉、対応を探すことで、次第に対応できるようになり、達成感を得ていたという文献もあった^(文献12)。

表 1-1 小児看護学における保育園実習の学習効果に関する文献一覧

文献 No	文献テーマ	著書	出版・発行年数	研究方法	保育園実習の概要			学習効果		
					教育機関の種別/ 履修年次/ 実習の順序性	実習 日数	実習目的・目標	実習方法	内容	分類
1	小児看護学実習における幼稚園・保育園実習の有効性の検討 幼稚園・保育園実習前後の子ども観の比較から	高橋衣	足利短期大学 研究紀要/2007	質的研究	短大/ 3年次/ グループで 異なる	5日	健康な乳幼児の集団生活と最終日のまとめ1日で構成。事前学習(保育園の役割、発達段階、成長発達、日常生活習慣と成した看護を実践できる基礎的能力を養う。	随地実習4日と最終日のまとめ1日で構成。事前学習(保育園の役割、発達段階、成長発達、日常生活習慣と成した看護を実践できる基礎的能力を養う。	実習後に「肯定的イメージ」「成長的イメージ」「関わり役割的イメージ」が増加し、「否定的イメージ」は大きく減少した。 実習後のイメージは、「純粋」「好奇心旺盛」「かわいしい」「発想・感受性が豊か」「遊びでルールや社会を学んでいる」「集団のなかで優しく、思いやりが成長している」「褒める・認める」によって成長していくてであった。	○□☆
2	保育園実習における学習内容に関する検討	吉川一枝、 他	日本赤十字北海道看護大学 紀要/2003	質的研究	大学/ 4～3年次/ 記載なし	5日	子どもの成長・発達を把握(対象理解し、発達段階に応じて適切な働きかけ(援助方法)について学習する。	毎日異年齢の子どものクラスを担当。 最終日は学内で複数施設合同で意見交換。	学習内容の半数が対象の理解、ほぼ半数が援助方法であった。 子どもの姿では「想像力が豊か」「認めてほしい、注目してほしいや、成長・発達では「個別的」「年齢・月齢によって違うこと」「子ども同士成長しあう、関わり方では「その子に合った関わり」「褒める」「見守る」「安全な環境を整える」にこの大切さを学んでいた。	○□☆
3	保育所実習が看護学生の子ども観に及ぼす影響	矢田昭子、 他	島根大学 医学部紀要/2007	トライアンギュレーション	大学/ 3年次/ 記載なし	4日	子どもに接する体験を通して、子どもに対する理解を深め、子どもとの関わりを学ぶ。	随地実習3日と最終日の学内カンファレンス1日で構成。	子どもに対する感情は肯定的に変化し、特に子どもとの接触経験がない学生は有意に好転していた。子どもはイメージでは、「おもしろい」が有意に増加していた。学生の学びは、「成長・発達の「個人差」「月齢による違い」や、「個性に応じた関わり方」「ほめて、認めてあげることが満足感に繋がり、さらに自信や意欲へつながること」などであった。	○□☆
4	保育所実習における学びの分析	臼井徳子、 他	三重県立看護大学 紀要/2000	質的研究	短大/ 2年次/ 記載なし	4日	集団における健康な乳幼児と接する中で小児の理解を深め、望ましい子ども観を養い、小児の基礎ととする。	観察実習とカンファレンスを実施。	学習内容は、「子どもの能力」「社会性」「個性・個性性」などの成長・発達に關した項目と、「子ども像」「子どものコミュニケーション」「子どもへの接し方」などであった。	○□☆
5	小児看護実習前の保育所実習経験の有効性について の学びの分析	岸川亜矢、 他	千葉県立衛生短期大学 紀要/2000	質的研究	短大/ 2年次/ 3年次	4日	乳幼児に接する体験を通して乳幼児の理解を深め、小児看護の基礎能力を養う。	選択実習。	記述内容は「小さくてかわいしい」「感情が素直」「好奇心旺盛」「感性が豊か」「成長発達が目に見えてわかる」「大人が守ってあげる必要がある」「個性を大切にしたい」などであった。	○□☆
6	小児看護学実習における保育園実習の効果 の分析	平元泉、 他	秋田大学医療技術短期大学 部紀要/1998	トライアンギュレーション	短大/ 3年次/ グループで 異なる	2日	乳幼児とのかかわりを通して健康な乳幼児を養育する。	病棟実習と合わせて3週間の実習。	【子どもの見かた】「乳幼児の成長発達の理解」【成長発達に応じた保育の理解】の項目においては保育園実習の時期による差はなかった。【乳幼児の成長発達の理解】は「各年齢に応じた成長発達の理解」「個人差の理解」の成長発達の実践に「成長発達に適切な関わり」が	

表1-2 小児看護学における保育園実習の学習効果に関する文献一覧

文献 No	文獻テーマ	著書	出版/発行年数	研究方法	保育園実習の概要			学習効果	
					教育機関の種類/ 履修年次/ 実習の順序性	実習 日数	実習目的・目標	実習方法	内容
10	保育所実習を通しての子どもの食教育についての学習内容自由記述の分析から	上山和子 日本看護学会 論文集 小児看護/2008	トライ アンキ レーション	短大/ 3年次/ 記載なし	記載なし	記載なし	食教育に焦点を当てるように実施。 実習後にグループ討議。	子どもへの食教育について、成長・発達における健康管理と食を通じた食習慣の発達の2つの視点から学習していた。	□ ☆
11	看護学生の保育園実習におけるお楽しみ会(遊びの会)の学び	高橋紀美子 岡山県立大学 保健福祉学部 紀要/2006	質的研究	短大/ 4~3年次/ 保育園実習 が前	小児看護学実習の目標の一つを、子どもとの直接的なかわりから、小児期の成長・発達を体験的に捉える学生はお楽しみ会を企画・子どもの特性を知ることと実施・評価する。	5日	事前準備1日間と臨地実習4日間で開催している。	受持ちクラスとは違う他年齢の発達も学ぶことができていた。「興味をもつと興奮しやすい」「想像力の豊かさ」「自己中心的」など年齢の特徴や、「子どもにもわかる言葉」「子どもの反応に合わせる」「待つこと」の大切さに気づいていた。	○ ☆
12	保育園実習4日間の戸惑い場面における看護学生の子どもの関わり方の変化	網野裕子 岡山県立大学 保健福祉学部 紀要/2009	質的研究	短大/ 記載なし/ 記載なし	記載なし	6日	記載なし	臨地実習4日と学内での準備とまとめ各1日で構成。継続して同じクラスを担当。	☆
13	保育所実習における学習成果保育士からの学びの明確化	岩田みどり 新潟医療 福祉学会誌 /2010	質的研究	短大/ 記載なし/ 記載なし	健康な乳幼児の成長・発達を理解し、自立へ向けた日常生活行動の援助を習得する。	2日	記録は、実習目標、一日の体験記録、成長と発達の観察記録。	保育士の関わりから「原に考える時間をとっていた」「発達に応じた援助」「わかりやすい言葉を使っていた」「子どもに安全な環境づくり」などを学んでいた。	☆
14	保育園実習が学生の「子どもの見方」に与える影響	星野抄織 共立女子短期 大学看護学科 紀要/2007	質的研究	短大/ 2年次/ 3年次	健康な乳幼児の日常生活と遊びを通して小児の特性を理解し、成長・発達を促す保育の実際を学ぶ。	5日	記載なし	実習後はイメージが肯定的になっており「素直に子どもがかわいいと思う」ようになり、「動き回る」「駄々をこねる」「よく泣く」の内容は減少していた。成長・発達では「発育や発達段階を見て何歳か予測できるようになった」の記載があった。	○ □
15	看護学生の幼稚園・保育園実習前後における子どもへの認知とイメージの変化	谷本公重 香川医科大学 看護学雑誌 /1999	量的研究	大学/ 3年次/ 保育園実習 が前	幼稚園、保育園において子どもと生活を共にする中で、個々の子どもの心身状態を把握し健康な子どもの理解を深め、適切な援助を学ぶこと。	5日	記載なし	乳幼児に対する理解、感情、認知、態度について調査の10/18項目において、実習前と比較し実習後で好ましい方向への変化があった。「かわいい」「かわいしい」は実習前後ともに回答が多く、「元氣」「笑顔」「成長が早い」「年齢差が大きい」「個性がある」「個人差が大きい」は実習後に回答が増加した。	○ □
16	保育園実習における発達概念の学習・教育目標の分類体系を活用した検討	市江和子 看護教育/2001	質的研究	短大/ 3年次/ 保育園実習 が前	健康な小児の成長発達過程、健康な小児の日常生活の自立への援助方法、遊びが小児の成長・発達に及ぼす影響について述べる。ことができる。	2日	病棟実習と合わせ3週間の実習。 2日間同じクラスを担当。	2日間と短い実習であり「知識」「理解」の段階であり、「分析」「応用」する力が弱い傾向がみられた。「遊びが成長させていく」「一人ひとりの成長をみなければいけない」「成長発達過程を目にすることができた」などの記述があった。	○ □
17	保育園実習に見る看護学生の子どもの観	東野充成 九州大学 医学部保健 学科紀要/2005	質的研究	短大/ 1年次/ 記載なし	保育園で生活している子どもの観察と関わりを通して成長発達過程にある健康な子どもを理解する。	1日	記載なし	子どもの理解として、「自己主張を強く持っている」「発達段階」「発達段階の個性性」などを捉えられていた。	○ □
18	臨地実習による看護学生の子どもの好感度調査からの考察	高橋恵美子 島根県立看護 短期大学紀要 /2000	量的研究	短大/ 3年次/ 保育園実習 が前	健康な子どもの理解を図る。	6日	記載なし	授業開始前に子どもが「好き」と答えた学生は4割であったが、保育園実習、病棟実習で子どもと触れ合う経験を通し好感度は増加した。	○
19	保育所実習前後の看護学生の子どものイメージの変化	白水美保 鹿児島大学 医学部保健 学科紀要/2008	質的研究	大学/ 3年次/ 保育園実習 が前	保育活動に参加しながら、小児の成長発達を学び、健康な小児の理解を深める。	1日	事前学習(発達の特徴、遊びと生活習慣、事故、保育園概要)。	保育園実習は現在子どもどもの世話経験のない学生に特に有効であり、肯定的な子どものイメージ変化へとつながっていた。「元氣である」「いまじしい」「子どもが泣いていると、近づいて声をかけたくなる」は有意に増加し、「弱い」「無知である」「うるさい」は有意に減少した。	○
20	小児看護実習における看護学生の子どもに対するイメージの変容・病棟実習と保育園実習の因子分析的検討	草野美根子 日本看護 学会集録 看護教育/1997	量的研究	大学/ 記載なし/ グループで異なる	記載なし	記載なし	記載なし	小児看護実習では、病棟実習と保育園実習のどちらを先に実習しても子どもに対するイメージの捉え方に相違はなかった。	○

*分類 ○:子ども観の形成 □:成長・発達の理解 ☆:子どもとの関わり方の理解

IV 考 察

保育園実習は8割以上の教育機関で実施されているとはいえず²⁾、選定された文献においては教育機関ごとに実習方法が異なり、特定の実習方法が学習効果に結びつくとは一概に言えないが、文献を分析することで、実習方法や学習効果に共通性がみられる内容があり、保育園実習の教育示唆と研究課題が得ることができた。以下にその内容を考察していく。

1. 実習の順序性

保育園実習を先行実施している教育機関は13件中10件と約8割みられた。今回得られた文献の中で、保育園実習後に病棟実習を実施するという実習の順序性は、子ども観の形成や成長・発達の学びには影響ないという研究もあり^(文献6,20)、「子ども観の形成」や「成長発達の理解」を保育園実習の目標に位置付ける場合においては、病棟実習との順序性に必ずしも捉われる必要がないことが示唆された。しかし、未だ実習の順序性に関する研究は少なく、小児看護学実習全体を通しての学生の学びの差異は明らかにされていない。このことから、実習の順序性については今後も研究を進め、学生の学習効果への影響について検討していく必要がある。

2. 学習効果と実習期間

学習効果は、『子どもの理解』と『子どもとの関わり方の理解』に現れていた。各学習効果別の平均実習日数は、『子どもの理解』4.1日、『子どもとの関わり方の理解』4.5日であり、実習日数が長いほど、学生が子どもの反応に合わせるなどといった、子どもへの援助方法や、かかわりに関する意識についての学びが得られていた。実習日数による学生の子どもの関わり方の変化をみると、実習日数が2日間では学生が子どもとの関わりに困難感を感じていたが^(文献20)、4日間の実習では、学生が子どもへの対応ができるようになり達成感を得ることができていたという研究もある^(文献12)。このことから、『子どもとの関わり方の理解』と達成感を得るためには、実習日数を2日間の短期間に留めず4日間確保することが望ましいと考えられる。しかし、2日間の実習であっても、学生が子どもとの関わりの中で生じてくる困難を乗り越えられるよう支援を工夫することは可能と考えられ、実習日数を考慮した実習方法の開発も必要になると考える。

3. 学習効果を高める実習方法

実習方法として、事前学習を取りいれている5件中4件^(文献1,8,11,12)、ディスカッションを実施している7件中7件^(文献1-4,8,10,12)において、学生の学びは『子どもとの関わり方の理解』まで深化できていた。短期間の保育園実習においては、事前学習やディスカッションを活用することで、学生

の学びの深化に期待できることが示唆された。また、実習中の記録用紙においても、アセスメントシートを活用している教育機関では、学生が子どもの発達を粗大運動領域などの領域毎に把握できており^(文献7)、記録用紙の活用が学生への学習目標の意識づけに効果的であったと考える。しかし、保育園実習における、事前学習やディスカッション、記録用紙が学習効果にどのような効果をもたらしているかは検討されておらず、具体的な方法は明確化できていない。保育園実習の質の向上のために、効果的とされる事前学習やディスカッションの方法、記録用紙の内容を明らかにすることが今後の課題である。

4. 慢性疾患や障害をもちながら生活する子どもの理解

本研究で選定した文献の16件中11件^(文献1,4,6,8,9,13-18)が、保育園実習の目的・目標を健康である子どもの理解としている。だが、吉川らは保育園実習での学生の学びの中から、「保育園の子ども」＝「健康児」と表現できないことを示している^(文献2)。現代においては、保育園でも8割以上のクラスに食物アレルギーや喘息なども慢性疾患をもつ子どもが生活しており³⁾、発達障害をはじめとした障害児も増加傾向である⁴⁾。このように、保育園実習では、健康な子どもの理解だけではなく、慢性疾患や障害をもつ子どもたちが在宅に帰ってから保育園でどのように生活するのかを理解する貴重な機会にもなりうる。保育園実習の目的・目標に疾患をもつ子どもたちの在宅における理解を深めることを加え、学生に学習の視点を与えることで、保育園実習の学びを広げることに期待できる。

V 結 論

1. 保育園実習後に病棟実習を実施するという実習の順序性は、「子ども観の形成」や「成長・発達の学び」においては影響ないとされていたが、研究数は少なく、小児看護学実習全体を通しての学生の学びの差異は明らかにされていないため、今後も検討していく必要がある。

2. 『子どもとの関わり方の理解』と達成感を得るためには、実習日数を4日間確保することが望ましいと考えられる。しかし、2日間の実習であっても支援の工夫は可能と考えられ、実習日数を考慮した実習方法の開発が必要になる。

3. 実習方法として、事前学習、ディスカッション、記録用紙を活用することで、学生の学習効果を高められることが示唆された。

4. 現代の特徴として、保育園実習に慢性疾患や障害をもちながら生活する子どもの理解という視点の必要性が得られた。

引用文献

- 1) 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書：18-22, 2007, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> (2014年12月16日アクセス)
- 2) 飯村直子, 伊藤久美, 江本リナ, 他：看護系大学における小児看護学実習の概要, 日本小児看護学会誌, 10(2)：16-21, 2001.
- 3) 片山美香：保育士がもつ慢性疾患患児の保育への意識に関する研究, 保育学研究, 48(2)：39-50, 2010.
- 4) Ⅷ.保育・健全育成, 柳澤正義（編）, 日本子どもの資料年鑑2012. KTC中央出版, 東京：291, 2012.